
好きです

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きです

【Nコード】
N6043F

【作者名】
るつね

【あらすじ】
白線だけを踏んで道を渡れたら、彼女に告白する。そう決めた俺は……。

白線だけを踏んで道を渡れたら、告白しよう。

いつもの通学路、いつもの交差点、そしていつもの横断歩道。

ここで願掛けをするのは初めてじゃない。今までではなくだらない、どうでもいいと言えどもいい願いだけだったけど。たとえば、学食でいつも食べてる日替わり定食Aを、五十円高い日替わり定食Bに変えるとか。

でも今日は違う。あの娘に告白する。好きだって言う。交際してくれって言う。

鳳凰院鈴音に、告白する。

容姿端麗、頭脳明晰、性格もよく、次期生徒会長間違いなし、という完璧超人。端的に言えば、高嶺の花というやつだ。

その花への告白を、この道路に引かれた白線に賭ける。

まず一步、そして二歩。

ここから先が問題だ。四歩目にあるはずの白線が消えているのだ。コツがある。三歩目を勢いよく踏み出し、その余勢をかって五歩目の白線まで大ジャンプ。ここさえクリアできれば、あとは簡単だ。ぐつ、と下半身を落として力を溜め、足を踏み出

「おっはよー」

俺はバランスを崩して、転倒した。

「わ、だいじょうぶ？」

「……肉体的にはな」

精神的なダメージは計り知れない。

見事、願掛けは失敗である。それも本人に邪魔されるとは。

艶めいた黒髪。純和風の顔立ち、とでも言うのだろうか。和服を着たらとても似合いそうである。

彼女、鳳凰院鈴音は首を傾げつつ、

「もしかして、何か願掛けでもしてたの？」

「まあな」

「なにになに？」

「大したことじゃねえよ」

「ふーん」

鈴音は、じつ、と横断歩道を見つめ、

「わたしもやってみようかな、願掛け」

「何をだよ」

これ以上、彼女に足りないものでもあるのか。

「そうだなあ」

鈴音は、人差し指を形の良いあごに当て、ちよつと考えるような仕草を見せてから、

「好きな人への告白、とか」

思わず、ぶつ、と吹き出す。

「へ、へえ、お前、好きな人なんかいたんだ」

「いるよ。わたくしめも、女の子ですから」

「……どんな奴？」

動揺を抑えて尋ねる。彼女に好かれるなんて、それ相応の器量の持ち主でないと、父さんは認めんぞ。

すると、鈴音は顔をしかめ、

「すつごく無礼な人」

「何だよ、それ」

「言いたいこと、ずばずば言ってくるし。初対面の挨拶が、『牛乳飲んでるか？』」

「牛乳？」

「続いた言葉が『ちよつと胸の発育が悪いな』」

おいおい、すごい奴もいたもんだ。笠根学園の傍若無人とあだ名されるこの俺でさえ、そんなことは言えないぞ。

「でもね」

鈴音が言葉を続ける。

「ふとした時に優しかったりするんだ。何より、わたしを普通の女

の子として扱ってくれる人なんて、初めてだったの。みんな、わたしには敬語使って、無意識に壁を作ってたから」

そう言う鈴音の顔は、恋する少女そのもので。嫉妬なんて暗い感情は吹き飛んでしまった。

こいつが幸せなら、その相手が俺でなくても。

ぼんやり考えていると、鈴音が、こちらの顔をのぞきこんできた。「覚えてないの？」

「何を」

彼女はため息を吐き、

「訂正。無礼なうえに、鈍感」

そう言って、ちよつと後ろに下がり、横断歩道に向き合った。

「いくよー」

と、一歩目。おいおい、ふらついてるよ。そういえば、運動はあまり得意じゃなかったんだっけ。鳳凰院鈴音、唯一の弱点。

二歩目。またふらつく。

「待て待て」

三歩目を踏み出そうとした鈴音に、たまらず声をかける。

「そこにはコツがあるんだ。いいか……」

と、先ほどの三歩目についてのコツを伝授する。てか、これって鈴音の恋を応援してることになるよな。何やってんだろ、俺。

「わかったー」

一子相伝の横断歩道白線踏みの極意を伝授された鈴音は、先ほど俺がやったみたいに、ぐつ、と下半身を落とした。

次の瞬間、彼女は思い切り足を踏み出し、

とん、とんっ。

見事、白線を踏みつつ、横断歩道を渡りきった。

ふう、と安堵の息を吐きつつ、これで彼女は好きな奴に告白するという大義名分を手に入れた、とわずかに胸が痛んだ。

グッバイ、俺の恋。

「ねえ！」

鈴音が、こっちに向かって声を上げる。
「わたし、あなたのことが」

（後書き）

またも苦手科目に挑戦してみました。多いな、苦手科目。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6043f/>

好きです

2010年10月30日04時00分発行